



Title	平取町らしいこれからの景観保全
Author(s)	麻生, 美希
Citation	アイヌの伝統を基層にした多文化な景観：北海道平取地域の文化的景観に関する論説集, 2-3
Issue Date	2024-03-29
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/92885
Type	report part
File Information	ronshu_biratori (3).pdf



[Instructions for use](#)

平取町らしいこれからの景観保全

麻生美希
同志社女子大学生活科学部人間生活学科 准教授

平取町の景観から、私たちは何を読み取ることができるのだろうか。一つは、アイヌの自然を見る眼差しである。様々な地形にアイヌ語地名が付けられ、中でも特徴的な場所は神々の物語の舞台となっている。狩猟・漁労・採集などを行う生活の場であるIWORの広がりを感じ、チノミシリという祈りの場所もある。それらは、唯一無二とも言える平取町の文化的景観の価値の根幹をなす。もう一つは、近代以降の開拓地としての平取の姿である。それは和人の移住とともに、生産性の向上を目的に自然に積極的に手を加えてきた歴史である。河川沿いの低地を中心に引水できる場所は灌漑用水を整備して造田し、台地や緩傾斜地は畑や牧場として活用した。森は林業の場となり、クロムなどが採掘できる場所では鉱業も発展した。明治・大正には水害に見舞われたが、治水事業により克服し、ダムを整備することで河川水量の調整や飲料水の確保、発電も行われるようになった。

このように、様々な要素に神を見出し自然に人間の暮らしを合わせてきた暮らしの姿と、人間の暮らしを発展させるために自然に手を加えてきた暮らしの姿が一つの景観に混在しているのが平取町の景観である。例えば、宅地でも、コタンの特性を継承する集落型もあれば、近代開拓に典型的な農地に囲まれた散居型も見られる。シマフクロウが棲める森の再生を目指した活動が行われる森もあれば、森林施業が行われる森もある。平取町の景観からは、その相反するとも言える二つの生活のあり方を知ることができる。

では、その景観をどのようにして共有財産として伝えていくべきだろうか。景観保全というと、新たな建造物を周囲の環境と調和させるために、色や高さ、意匠などを制限することだと解釈されることが多い。建造物の集積で成り立つ都市景観には、その手法は最も効果的かもしれない。しかし平取町のような厳しくも豊かな広大な自然の中で、家を建て、農地を耕し、河川や森を活かしてきたことによって形成された景観においては、建造物の形態・意匠以上に、地形や地域の歴史的経緯を尊重した土地の使い方を考えることが重要である。前述のように、ありのままの自然を生かすアイヌの暮らしもあれば、自然に手を加えることで生産性を向上させてきた産業もある。今後、新たな開発行為や建築、土地利用を行う際にそのどちらに重点を置くのか。また、その間でバランスをとるのか。自然と人間との関係性を景観から学んだ上で、地域のこれからの発展を考えることが平取町らしい景観形成なのではないだろうか。それは平取町にとどまらず、全国の文化的景観保全のあり方に一石を投じる可能性がある。なぜならば文化的景観とは、地域の風土と人の暮らしによって形成されるものであり、その関係性を考え続けることこそが、その保全の本質と考えるからである。

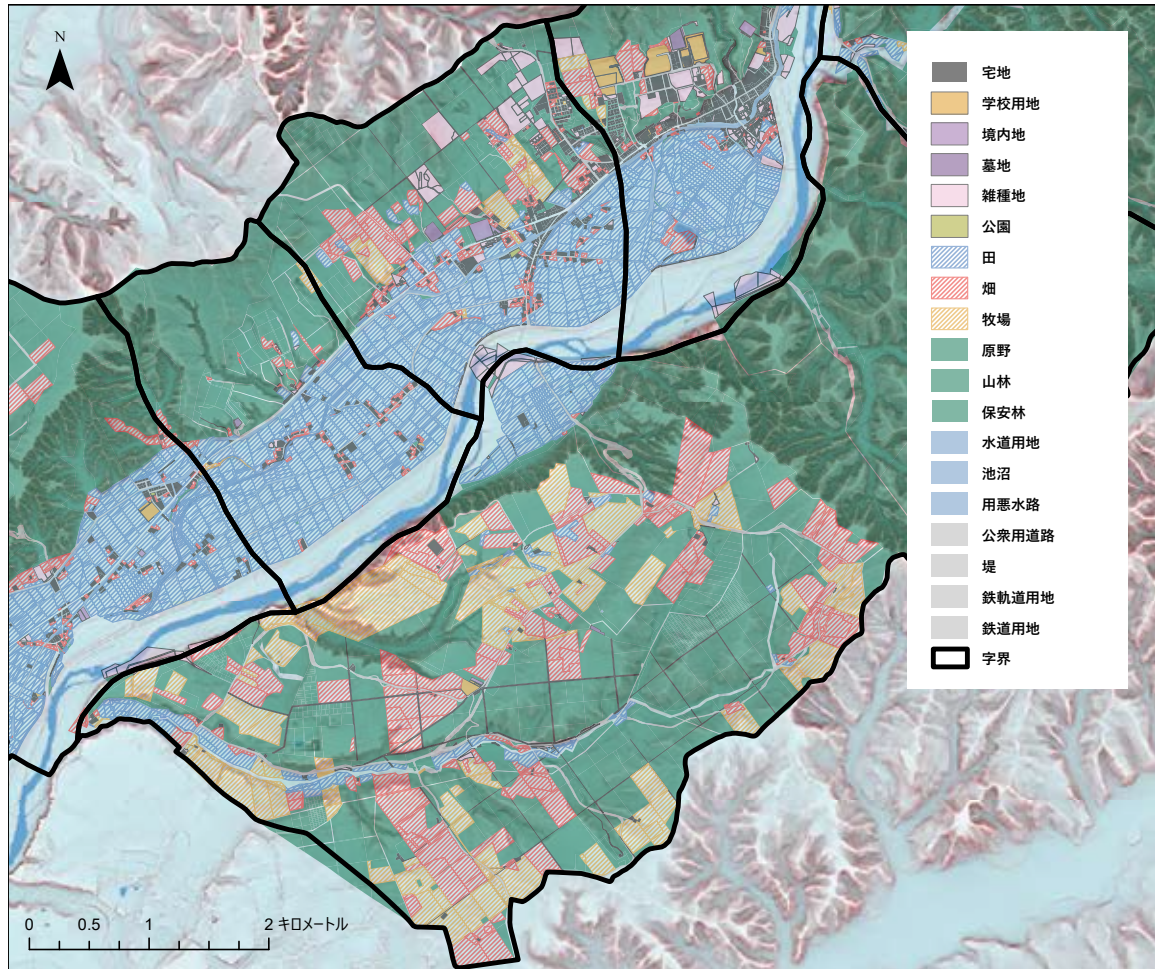


図1 紫雲古津・去場・荷菜・本町・川向の現況地目（アジア航測株式会社の赤色立体地図をベースに作成）
開拓という営為の中でどのように土地利用が進められてきたのかを読みとることができる。